

<写真の部> 木 島 衛

今年から新たにインターネットでの応募も始まり、また、天候も昨年より良かった事もあり、応募数も昨年より27点程増え、最終的に23人で84点の応募がありました。関係者として大変うれしく思っています。

公募は、今回で6回目となりますので、皆さん題材探しには大変苦労している事と思います。その中で今年もまだ見た事のない作品が多くあったことは、うれしい限りです。皆さんの努力には敬服するしだいです。今年もバラエティーに富んだ作品が集まり、楽しく審査ができた事に感謝申し上げます。

審査は、まず、ピントが極端に甘いもの、ぶれているものは、残念ながら審査の対象外としてから、審査員全員による投票で作品を選出いたしました。その次に個々の作品に対する投票点数や写真のバランス等を考慮し、上位2点、入選8点、佳作3点の計13点を決定しました。

鎌足桜保存会会長賞の黒須俊夫さんの作品「漂う風格」ですが、生命力とダイナミックさを感じる素晴らしい作品です。アカデミア公園にある古木ですが、朽ちようとする古木の木の肌に光が差し込み、立体感が強調されていますし、縦位置にすることによって高さが強調されています。周りの雰囲気も良いですし、特にいいのが、白く光る飛び気味の雲があることによって古木の生命力を強く感じますし、構図もしっかりしていて大変素晴らしい作品だと思います。

鎌足公民館館長賞の中山要三さんの作品「練習中」ですが、親子の微笑ましい感じが良く出ている作品です。ここの「さくら公園」の作品は、良くコンテストでも出てきますが、動きのある作品はありませんでした。今回、中山さんの作品は、桜を主体に置きながらも脇役として親子の自転車乗りの練習風景を入れたことによって動きのある作品となりました。母親の子供にそっと添えた手や仕草が自然で親子の絆を感じます。

最後にこのコンテストは、鎌足桜だけのコンテストですので、同じような作品がたくさん出てきます。他の人と違った観点から作品作りをすると今年の上位作品のように入賞の確率も高くなると思いますので、研究をして是非、来年も応募して頂きたいと思います。

<短歌の部> 鈴木 眞 澄

短歌の部では122首の作品を応募していただきました。今年はメールでの応募も行われて、地元木更津はもとより、県内や全国からも作品がよせられました。昨年より35首多く、これはとても嬉しいことでした。

審査はあらかじめ各実行委員の皆さんが10首ずつ選び、その結果をもとに点数の上位から検討し、次のような結果になりました。

鎌足桜保存会会長賞の上杉章子さんの「無住寺の鐘つき堂のかたわらに今年も咲けりかまたり桜」では、「無住寺」ということばが生きていると思います。住職のいない寺の、しずかな古いたたずまいが想像されます。その鐘つき堂のかたわらに人しれず咲く桜を詠っています。「今年も咲けり」が歌に深みを加えています。情感のある歌です。

鎌足地区区長会会長賞の中沢敬子さんの「風のままさくらの花のゆらぎいて春の喜び我が胸に満つ」は、吹いている風に従って自在に揺らく桜の花、それを無心になって見ている作者です。言葉の運びがいいです。そして下の句では、作者自身の内に溢れる喜びを率直に言って、気持ちがよく伝わってきます。

その他、入選8首、佳作3首でした。今年作品は「旧かな遣い」と「新かな遣い」が半々くらいでした。今はどこの大会でも同じ傾向にあります。

「新かな」でも「旧かな」でも自由ですが、「旧かな」の方が格調が高くなるということは言えると思います。

いずれにせよ、最も大切なことは一首の中に自分のとらえたところのある歌、確かな内容のある歌であることです。

今年は中学生の入選もあり、大人の歌の中に混じっていきいきと存在感を示していました。

4月の半ばから咲く美しい鎌足桜を、また皆さんに是非見にいただきたいと思います。そして歌にしてみてください。日本人には誰にもその素養が備わっているといわれていますから。

<俳句の部> 川 合 憲 子

俳句の部は94人(242句)の応募がありました。その中でも地元の鎌足中学校が全校で地元の歴史ある鎌足桜の俳句に取り組み、38人(86句)の応募があったことは大変素晴らしいことでした。これは、地域の文化や伝統を継承することを学ぶと共に、更に生徒にとっての「ふるさと」を大切にしていける心につながって行くことと思います。

作品の審査ですが、生徒の作品を一般の作品と一緒に審査することは少し無理がありますので、今回は生徒作品3句を佳作としました。その際、自分のことばで素直に表現している作品、言いたいことを具体的に表現している作品を選びました。

一般作品ですが、どうしても発想や材料が似てきます。鎌足桜保存会の皆様との話し合いの席で「鎌足桜ははらはらと散らないよ」「やはり鎌足という言葉があった方が」とう声を聞きました。

鎌足桜保存会会長賞の須田真里子さんの「八重桜満ちて鎌足日和なり」は満開の鎌足桜となった地元への挨拶句として「鎌足日和」が今までになかった表現で賛同を得ました。

新千葉新聞社社長賞の石井紀美子さんの「ひびき合う光よ風よ花万朶」は、大変リズムカルで「光よ風よ」のリフレインが明るくさわやかです。

入選の岩瀬由美子さんの「公園に弾む声あり八重桜」は「弾む声」、森孝子さんの「さくら咲く子の声あふれ日のあふれ」はリフレインの楽しさとひらかな表記等細やかな作品、更に、多くが夕暮れの景を詠む中で金澤恵子さんの「鎌足の朝の集落花明り」は、朝の鎌足の風景が静かに描かれ新鮮でした。

入選の元吉和江さんの「よく笑ふ女四人や八重桜」と同じく入選の川俣婦美子さんの「ご朱印の文字黒々と里桜」は、鎌足桜と全く違うものを取り合わせた句として、鎌足桜の雰囲気をよく出していると思います。

今回、初めて俳句の審査をさせていただきましたが、郷土を愛する鎌足の皆様と一緒にお仕事が出来たことを幸せに思います。ありがとうございました。